英米文化の背景
「英米人の迷信・俗信」考 (9) Ⅲ 恋と結婚
—その4 廃れたガーター投げ・祝福のコンフェッティと古靴投げ・花嫁へのキスの雨・帰り道での用心・すべて花嫁が中心

藤高 邦宏
倉敷芸術科学大学国際教養学部

(2000年9月30日 受理)

はじめに

英米での結婚式は多くの場合，教会で牧師あるいは司祭が司会進行役を務めて行われる。花婿が祭壇の前で待ち，花嫁は父親に導かれて祭壇へと進み，花嫁は父親から花婿に引き渡される。花嫁花婿両人は祭壇の前で牧師の指示に従って誓いを交わす。

牧師はまず花婿に向かって尋ねる。その内容はちょうどWilliam Shakespeare, *As You Like It* で見られるように，"Will you Orlando have to wife this Rosalind？"[1]（オーランドウ，汝このロザリンドを汝の妻となすことを願うか）という *The Book of Common Prayer*（『祈祷書』）のお決まりのものである。さらに続けて，妻を愛し妻に誠実であること等を願うかと尋ねる。花婿はすべて"I will."（願います）と答える[2]。今度は花嫁にも同様に尋ねる。ただしその中で，"obey him？"（夫に服従するか）の箇所は，これまで女性の人権上問題視されてきており，"obey"はしばしば"cherish"（大切にする）等に置き換えられる。（かつて1927年，議会で同箇所削除案が出されたが，否決された経緯がある。）

宣誓後は，指輪の交換等へと進み，結婚式は比較的短時間で終わる。そして教会の鐘（bell）が晴れやかに鳴り響く中を，新婚夫妻は腕を組んで堂の外へと向かう。外には至高の幸福に輝くカップルを祝福しようとして，祝賀客や関係者一同が待ち構えている。

今号では，挙式後の新夫妻へのコンフェッティや古靴投げ等のさまざまな祝福の習慣とその起源，いわれ，及びそれらの習慣にまつわる種々の迷信・俗信に重点を置き，併せてその文芸用例をも挙げながら考察を試みたい。

1 廃れたガーター投げ

かつての結婚式を賑わせたものにガーター投げ（fling of a garter）と呼ばれる習慣があった。この習慣は，挙式後，新夫妻がまだ教会にいるあいだに，花嫁が自らのガーターを外し，辺りにいる付添人その他の未婚男性たちに向かって投げ与えたものであった。

☆「花嫁が身につけていたガーターは幸運をもたらす」と言われる。

☆「花嫁の投げたガーターを拾った若者は，それを帽子につけて携えていて，自分の選んだ女性に幸運を祈って進呈した」とされる。

このガーター投げの習慣は，最初の段階ではかなり違ったものであった。かつて新婚旅行に出る習慣がまだなかった19世紀以前の時代に，挙式後，披露宴も終わり祝賀客たちが花嫁花婿をはやし立てて寝室まで送り届け，そこでストッキング投げ（throw of stockings）の儀式がなされた際に，「花嫁が自ら弛めたガーターを，その場にいる若者に外させた」のがもとの習慣であった。（因みに，次いで男たちは花嫁の靴下を，女たちも花婿の靴下をはぎ取り，ベッドをはさんで合図でそれらを投げ合い，自分の投げた靴下が花嫁か花婿の鼻に引っかかった者が次に結婚する幸運を得る，という占い儀式を行った。）

新婚旅行が一般的になってからは，当然ながらガーター外しの習慣もストッキング投げの儀式もなくなったが，ガーター入手を熱望する若者たちのために，花嫁は，挙式後教会にいるうちにガーターを外して投げるようになった。ところが若者たちは，まだ花嫁が祭壇の前にいるうちにそれをせがんだり，その奪い合いのためにしばしば大騒ぎが起き，またその雰囲気が艶っぽく不謹慎であるとのことで，教会が礼節を求めるところとなった。そのため，花嫁はガーターの代わりに花輪を，周りの未婚女性に投げるようになった。

☆「花嫁の投げた花輪を拾った未婚女性は，花嫁の幸運にあやかる」と言われる。

この花輪を投げる習慣は，やがて，今日極めて一般的な習慣となっているブーケ（花束）を投げる習慣へと発展したと見ることができそうである。かつてのガーターにせよ，今日の花輪や花束にせよ，いずれにしてもそれは，結婚式という晴れの日の中心人物である花嫁を象徴するものであり，またそれはまさに注目の的たる新婦に賑やかな「花」を添えるものだと言えるであろう。

2 祝福の鐘とアーチくぐり

教会の鐘が鳴る中を花嫁花婿は姿を現す。結婚式の鐘は新夫妻を祝福し，人々に新夫妻の誕生を知らしめるものであるが，かつてはもう一つの役目があったとされる。

☆「鐘は，新婚夫妻に近寄り災いをもたらそうとする悪霊を，その聖なる高らかな音で怯えさせ追い払うもの」と信じられた。

外では祝賀客と関係者一同が，二人を祝福しようと待ち構えている。

☆「新婚夫妻を祝福して，幸多かれとアーチを作ってくぐらせる。」人々の作ったアーチの下は，新しいカップルの門出の花道となる。時によると人々は，カップルの職業にふさわしい物－軍人なら軍刀，農民なら干し草用フォークなど－でアーチを作る。

☆「結婚を祝福して，花嫁に触れた者は縁起がよい。特にそれが未婚女性の場合には，間もなく結婚することになる」と言われる。

☆「二人の通路に，幸運を願って砂模様（lucky sand patterns）を描く。」[3]これはやや特異

な習慣で，特にCheshire州Knutsfordで続けられている伝統的習慣と言われる。

3 「子宝祈願」のコンフェッティ・小麦・米の投げかけ

新婚夫妻を祝福して，その頭上にコンフェッティ（紙吹雪）や米等が投げかけられる。

☆「幸運を祈って，コンフェッティが二人の頭上に振りまかれる。」コンフェッティには色とりどりの色紙が用いられ，賽の目やただ小さく切っただけのものもあれば，幸運を象徴する鐘や馬蹄（horseshoe）の形に切ってあるものも見られる。

新婚カップルの頭上にコンフェッティを振りまく習慣に関して，Peter Lorieは，「もとの習慣は『小麦を花嫁の頭上にのみ投げるもの』であった。それは小麦がパンを作り出すように花嫁が子を生む，という多産の直接的象徴としてであった」[4]と記している。

☆「豊饒と多産の象徴である小麦や米，場合によってはコーンが二人に投げられる。」

米，小麦，コーンは穀物類であり，その豊かな実りこそまさに多産の象徴である[5]。従って，この習慣には本来，「新婚夫婦が子宝と繁栄に恵まれるように」との人々の願いが込められているわけである。

ローマ時代の結婚式では，花嫁は小麦の束を手に持っていたとされる。儀式を終えると花嫁花婿は「いっしょに小麦で作ったケーキを食べた」とされる。（「結婚式」に相当するラテン語は「いっしょに小麦を食べること」を意味する“*conferreatio*”であった。）イギリスがキリスト教徒の多い文化圏となり，やがて中世のある時期に，キリスト教徒たちは，結婚した男女に小麦を投げるユダヤ教徒の習慣をまね始めた。やがてこの小麦からビスケット類の菓子を焼き，小麦の代わりに花嫁に投げたり，その菓子を花嫁の頭上で砕いたりする習慣が生じた[6]。次は，今日では見られないが，そうした習慣の一つである。

☆「花嫁が教会を出るとき（他，披露宴中，その前後等）に，布片が花嫁の髪の上に広げられ，オートミルで作られたケーキあるいは皿が頭上で割られた。この儀式では，ケーキや皿が細かく砕けるほど結婚生活の至福の歳月が保証される」と言われた。この用例がTobias Smollett, *Humphry Clinker*（1771）に見出される。

> ...a cake being broken over the head of Mrs. Tabitha Lismahago [bride], the fragments were distributed among the bystanders,...[7]
>
> （…タビサ・リスマヘイゴウ夫人［花嫁］の頭上でケーキがつぶされた後，その片がそこに居合わせた人々に配られた。…）

ところで，小麦の菓子を渡された招待客たちはそれを投げたが，小麦の菓子をもらえない人々は投げる物を探し，その結果，米を投げ始めた。既述の通り，米も確かに多産の象徴である。E. C. Brewerは，「花嫁の後ろから米を投げる風習はインドに起源を有する。というのは米はインド人にとっては多産の象徴だからである」[8]と記している。インドが歴史的に米の主産地であること，また豊かな実りと子宝とは結びつくこと等を考えあわせる

と，この習慣のインド起源説もうなずけるように思われる。次に挙げるのは，米を投げる習慣の用例で，Arnold Bennet, *Riceyman Steps*（1923）からの一節である。

> ...Elsie [the maidservant]...out of a paper bag flung a considerable quantity of rice on to the middle-aged persons of the married ...'I had to do it, because it's for luck,' Elsie aimiably explained, not without dignity.[9]
>
> (…エルシー［女中］は…中年の新婚夫妻の頭上に紙袋からかなりの量の米を出して投げかけた。…「そうしなければならなかったのですよ，縁起物ですからねえ」とエルシーはなかなか威厳のあるようすでもって，愛想よく釈明した。)

新婚カップルにコンフェッティや穀物類の小麦，米等を投げるのは，やはり「彼らが特に子宝に恵まれるように」との人々の願いからである。色とりどりの華やかなコンフェッティは，地味な穀物類の代用品と見てよいであろう。因みに，ずっと古い時代には，子宝に恵まれることを願って次のような習慣があったと言われる。

☆「新婚夫妻は教会を出るときに，木の実（nut）の入った袋を贈られた。」[10]やはり木の実も多産を象徴するものなのである。[当稿シリーズ (1)－8 (p.71) で既述。]

4 「幸運祈願」と「新たな責任を認知させる」古靴投げ

☆「幸運を祈って，カップルの後ろから古靴を投げる。」一般に，これから新たなこと－旅行，船出，事業，受験，新居への住まい，またここでのような新婚生活等－を始めようとする人の幸運を祈って，その人の後ろから古い靴の片方を投げる習慣がある。この習慣に関して，Charles Dickens, *David Copperfield*（1849）に次の用例が見られる。

> When we were all in a bustle outside the door, I found that Mr. Peggotty was prepared with an old shoe, which was to be thrown after us for luck, and which he offered to Mrs. Gummidge for that purpose.[11]
>
> (私たちみんなが戸口の外で慌ただしく動いていたとき，私はペゴティ氏が古靴を片方用意しているのに気づいた。それは幸運を祈って私たちの後ろから投げるためのものだった。そして彼はその目的でそれをガミッジ夫人に差し出した。)

また，広い意味で用いられたようであるが，16世紀半ば以降の諺にも，"To cast an old shoe after one for luck."[12]（幸運を祈って後ろから古靴を片方投げること）が見られる。

ところでこうした場合に，なぜそれが古い靴の片方であるのか，これについてはどうも説明がつきにくいようである。これについて若干のヒントを与えてくれるのが，I. Opie & M. Tatem によって紹介されているスコットランドの人々の信である。それは「運命を手なずけるには使い古した革製品ほどよいものはない。しかも，左の片方でないと効き目がない」[13]という信である。この「使い古した革製品」については「履き古した靴」がまずそ

の恰好の物と言えよう。また「左（の片方)」については，説明のヒントも見あたらない。しかしながら－推測が許されるならばの話であるが－たいていの物事に関しては「人」は一般に「右」を好む，が，「気まぐれな」性格の持ち主である「運命」は，つむじ曲がりに「左」つまり「左の片方」を好むと考えられないであろうか。また，なぜ「後ろから投げる」のかについても明らかではないが，それは花嫁花婿を「後押しする」という応援者としての姿勢が表に現れたものと解することができそうに思える。

この「古靴の左の片方」の謎に関しては，上記の他にも，シンボル学の観点から別の見方ができるようである。シンボル学上では，「靴は新たな事柄への責任を象徴する」[14]とされる。つまり，新夫妻に，幸福な家庭を作り，子育てをし，世間付き合いをもしていくという「新たな責任を認識してもらおう」というわけである。しかも「履き古された靴」のように「丈夫で，逞しく」である。また，「後ろから投げる」理由についても，新たな責任を「肩や背中に背負わせる」という含意からくるもの，と推測できそうに思われる。

なお，この古靴を投げる習慣は，しばしばやや現代的なスマートさと，微笑ましいユーモアとを混ぜ合わせたものに姿を変えることがある。新婚カップルが挙式を終えて教会から披露宴に向かうときとか，あるいはハネムーンに出かけるとき，次の習慣が見られる。

☆「新郎新婦の乗り物の後部バンパーに，古靴の片方を，賑やかな音を立てる空き缶類とともに吊り下げておく。」

この行為は，たいてい花嫁花婿の友人たちの企てによるものであろうが，ときには例えば，バンパーに子連れのブタを繋いでおくような「いたずら」もある，と言われる。

5 近隣の子供たちのコインねだり

さらにまた，地域によっては次のような近隣の子供たちの祝福も見られる。

☆「新婚夫妻の幸運を願う子供たちが，教会の扉を閉ざし，夫妻がコインをばらまくまでは門を開けて通さない。あるいは教会の外ででも，コインをねだって二人の乗り物の進行を阻んだり，乗り物を追いかけたりする。」これは Wales や England の北東部及び南西部地域で見られる風習である。これは結婚式の後，近隣の子供たちが幸福な二人を祝福するとともに，自分たちの小遣いを公然と要求し手に入れるよい機会ともなるようである。これに関して James Kirkup 氏の子供時代の経験談がある。それは，イングランド北部の Tyneside で少年時代を過ごした同氏が，結婚式がある日には，式が済むまで他の子供たちと一緒に教会の外で待ち，やがて新婚夫妻が車で立ち去ろうとするとき花婿にコインを投げるようにねだった，という話である。

> ...when the bride and groom drove away in their limousine, we would run after the car shouting, in our curious Geordie dialect : "Hoy a ha'pny oot! Hoy a ha'pny oot!" (This means "Throw out halfpenny!") If the groom did not throw out money we used to curse the

marriage－what awful children we must have been![15]

（…花嫁花婿がリムジンに乗って立ち去るとき，私たちはよく車を追いかけては，奇妙なジョウディ方言で叫んだものだった。「ホーイ，ア，ヘイプニー，オウト！ホーイ，ア，ヘイプニー，オウト！」（これは「半ペニー硬貨を投げてよ！」の意味である。）もしも花婿がお金を投げてくれないならば，私たちは常にその結婚を呪ったものでした－わたしたちは全く恐ろしい子供だったに違いありません。）

6 花嫁の跳躍－花綱・棒・腰掛け・抱擁石の跳び越え

挙式後，花嫁花婿が教会域を出るとき，かつて特に花嫁に課された次の習慣があった。

☆「花嫁は，祝福者たちの差し出す花で飾った綱や棒，木製腰掛け，あるいは特にイギリス北部では跳躍石とか抱擁石（petting stone）と呼ばれるものを，跳び越えねばならなかった。」花嫁はこのとき，場合によっては夫あるいはその他の人の手を借りた。

この習慣は，「跳躍することによって花嫁が新生活に入ることを象徴したり」[16]あるいは「夫の妻に対する手助けという愛情を象徴するもの」[17]と見なされた。

なお，昔のこの習慣が，1944年という比較的に新しい時代になっても実行された報告例が見られる。それは，「Dorsetshireでのある結婚式の後，花嫁が教会の門のところで綱や腰掛けを跳び越えた」という報告である。報告の筆者はこの行為について，彼女が大切にしているものとユーモアを残したことに，大いに一層深い意味があると述べている[18]。

太古の時代には，花嫁は結婚式の後でよく木の丸太や茂みを跳び越えたと言われる。その理由は，子宝に恵まれるためにはそれに縁のある「樹木の霊」のご機嫌をとっておく必要があったからである[19]。これは，上述の新生活に入ることとか，夫の手助けの愛情等の象徴的解釈とは異なり，子宝に結びつく樹木崇拝という神秘的解釈と言えるであろう。

7 花嫁へのキスの雨－「共同生活体の歓迎儀式」

☆「式後，花嫁が煤で顔を真っ黒にした煙突掃除夫（chimney sweep）に幸運のキスを受けるのはめでたいこと」とされる。これは花嫁にまつわる昔からのしきたりの一つであり，かつてはよく煙突掃除夫を教会の戸口に待機させ，式後の花嫁に幸運のキスをしてもらうように仕組んだりさえした，と言われる。［このいわれは，前号第2項で既述。］

☆「挙式の後，披露宴に向かう途中，また披露宴の場でも，花嫁は周りの人々からたくさんの祝福のキスを受けるが，花嫁はこれを拒んではならない」とされる。この習慣はローマ時代からの伝統と言われるが，Tad Tulejaの記すように，それは，「花嫁への共同生活体の歓迎の儀式」[20]と見なされるべきものと言えよう。

8 帰り道での用心

教会を出た新婚夫妻は，披露宴の会場に向かうにせよ，これからの新生活を営む住居に

向かうにせよ，次のような諸点に留意すべきとされる。

☆「来たときと同じ道を通るのは縁起が悪い」とされる。新婚のカップルは，特に教会域を出るとき，教会に着いたときと同じ道筋を通ってはならないとされる。

☆「新婚夫妻は，挙式の帰りに，特に墓地門（lychgate）を通って出てはならない。」

☆「結婚式の乗り物が教会の入り口で向きを変えるのは，非常に縁起が悪い」とされる。これについては今日でさえも，縁起担ぎから，教会の入り口で馬車や自動車の向きを変えるのを嫌う人々が現にいるようである。

☆「結婚式の乗り物がギャロップで駆けるのは縁起が悪い」とされる。今日においても馬車にせよ，自動車にせよ，ともかく「ゆっくり進む」のがよろしき慣例とされる。

☆「新婚カップルが川を渡らねばならないときには，二人が肩越しに何か物を投げて『不幸があなたにくっついていきますように』と唱え，それを二度と見ないで立ち去らねばならない。」[21] この習慣は自動車の時代になってからは，ほぼ廃れてしまった。

☆「途中で，特に葬式の行列，また特にブタ（pig）に出会わないように注意すること。不運に見舞われることになる。」逆に，出会うと縁起がよいとされるものに，煙突掃除夫，動物では白馬（灰色の馬），ゾウ，それに特にイギリスでは黒ネコなどが挙げられる。

9 祝砲による「悪霊払い」

☆「結婚を祝って祝砲が撃たれる。」かつてよく挙式当日に，花嫁，花婿それぞれの一行が教会に向かうときに，花嫁花婿の友人，知人たちが，茂みや麦藁の山などの背後で，古めかしいマスケット銃やショット・ガンを空に放ち，その大きな音で結婚を祝した。場合によっては，それぞれの祝砲が競い合うように撃たれたりもしたとされる。さらに，結婚式を終えて教会から帰っていく新婚夫妻を祝福して，同様の祝砲が撃たれることもあった。この祝砲には銃だけでなく，銃床の穴に火薬を詰めておいて爆発させる方法もよく用いられ，これは大砲のような大きな音を立てたようである。

こうした祝砲によって，新婚カップルを祝福し，また新夫妻の誕生を世間に知らしめるわけであるが，この風習の裏には本来次のような目的があったとされる。

☆「祝砲の華々しい大音響によって，婚礼を邪魔する悪鬼・悪霊を追い払おうとした。」祝砲には，婚礼を阻む悪者を撃退せんとする人々の意図が込められていたのである。

10 すべて花嫁が中心

結婚式当日には，何事に関してもすべて花嫁が中心に考えられ，物事が進められる。この日ばかりは，花婿はたいてい無視されることを大いに覚悟しておくべきである。それは花婿の親，親族にしても然りである。（実は，bridegroom「花婿」の語でさえ，語源上では，*bridegome*（Middle English）〈*brȳd-guma*（Angro-Saxon）〉の語尾 *gome*〈*guma*〉の意

味がman「下僕」であるため，結局，bridegroom「花婿」は「花嫁の下僕」の意となる始末である[22]。）この「花嫁が中心」の考え方は，次のような祝福の挨拶言葉の用い方にも波及してくる。

☆「花嫁には“Congratulations！”と言わぬもの」とされる。この理由は，実は，“Congratulations！”という祝い言葉は，ある人が努力して何かを成し遂げたようなとき，それを祝福する言葉だからである。従って，もしも花嫁にこの言葉を使うとすれば，花嫁がその男性を追いかけ回した結果獲得したことを暗示することになり，これは祝福どころか，花嫁に対する一大侮辱となってしまうわけである。

一般に，花嫁に対しては，“What a lovely bride! I wish you great happiness！”（なんてすてきな花嫁さんでしょう！ご幸福をお祈りいたします）などと祝うのがよいとされる。あるいは手短に祝いを述べるとすれば，例えば，“Best wishes！”（おめでとう［ございます］！）とか“Best wishes and good luck！”（おめでとう［ございます］，お幸せに！）と挨拶するのがよいようである。

一方，花婿に対しては，“Congratulations! [You are fortunate.]”（おめでとう［ございます］！［あなたは幸運ですよ］）と言えばよいとされる。

因みに，花嫁花婿両者がいる場では，二人に向かって，“Congratulations and best wishes！”（本当におめでとう［ございます］！）と挨拶するのが一般的のようである[23]。

欧米の結婚式当日には，挙式そのものはもちろんであるが，披露宴であれ，その他であれ，ほとんどのことにおいて「花嫁が中心」と考えられ，それに基づいて物事が運ばれる傾向が強い。英米においても，これが婚儀における一つの伝統なのである。しかしながら，我々は，欧米以外の世界の他の文化においても，結婚式当日には花嫁が中心的存在と考えられる歴史的，伝統的傾向を見出すのにあまり苦労はなさそうに思える。我々は，婚儀におけるこの「花嫁が中心」という微笑ましい伝統が，我が国をも含めた多くの文化において共有されていることに気づくとき，新たな共感を覚えざるを得ないであろう。

［次号「披露宴・ハネムーン・花嫁の敷居越え」等に続く。］

Acknowledgements :

貴重なご教示をいただいたAmy Chavez女史に感謝申し上げる。

Notes :

1）William Shakespeare, *As You Like It*, Ⅳ－1，123－24，The Arden Edition of the Works of William Shakespeare, ed. Agnes Latham（1975；London：Routledge，1994）.

2）“The Form of Solemnization of Matrimony,” *The Book of Common Prayer*（Oxford：Oxford UP.，1969）364－65.

Wilt thou have this Woman to thy wedded wife, to live together after God's ordinance in the holy estate of Matrimony? Wilt thou love her, comfort her, honour, and keep her in sickness and in health；and, forsaking all other, keep thee only unto her, so long as ye both shall live? / I will./...

3) "Weddings," *The Customs and Ceremonies of Britain*, ed. Charles Kightly (London : Thames and Hudson, 1986) 230 (L).

4) Peter Lorie, *Superstitions* (New York : Simon & Schuster, 1992) 214.

5) "Wheat," "Rice," "Corn," *Dictionary of Symbols and Imagery*, ed. Ad de Vries (Amsterdam : North-Holland, 1974).

6) Tad Tuleja, *Curious Customs* (New York : Harmony Books, 1987) 62−63.

7) Tobias George Smollett, *The Expedition of Humphry Clinker*, The Modern Library (New York : Random House, 19− ? 〈Introduction right, 1929〉) 424.

8) "Rice," *Brewer's Dictionary of Phrase and Fable*, rev. Ivor H. Evans, Centenary ed. 6 th imp. (1870, ed. Ebenezer Cobham Brewer ; London : Cassell, 1978) 916 (L).

9) Arnold Bennet, *Riceyman Steps*, Part Ⅱ − Ⅴ, 11th ed. 2 nd imp. (London : Cassell, 1968) 109.

10) "Rice," *Cassell Dictionary of Superstitions*, ed. David Pickering (London : Cassell, 1995) 218 (R).

11) Charles Dickens, *The Personal History of David Copperfield*, X, The Oxford Illustrated Dickens, rpt. (1948 ; Oxford : Oxford UP., 1991) 145.

12) "Shoe after one for luck, To cast an old.," *The Oxford Dictionary of English Proverbs*, rev. F. P. Wilson, 3 rd ed. rpt. (1935 ; Oxford : Oxford UP., 1992) 725 (L).

13) "Shoes, old : thrown etc. for luck," 1873 *Chambers' Journal* 810 [Scotland], *A Dictionary of Superstitions*, ed. Iona Opie & Moira Tatem (1989 ; Oxford : Oxford UP., 1990) 351 (R)−52 (L).

There is nothing like well-worn leather to propitiate fate ... we ... only mention it here to remind intending throwers that the shoe should belong to the left foot−there is no virtue in its fellow.

14) "Boot," Pickering, 40 (L).

15) James Kirkup, *British Traditions and Superstitions* (Tokyo : Asahi Press, 1975) 27.

16) *Folklore, Myths and Legends of Britain*, ed. Reader's Digest Assn., 2 nd ed. (London : Reader's Digest Assn., 1997) 59 (L).

17) "Petting stone, Bride steps or leaps over," 1962, *Times*, 6 Mar., 7 , Opie & Tatem, 304 (L)−(R).

18) "Bride," *Encyclopaedia of Superstitions*, ed. E. & M. A. Radford (New York : Philosophical Lib., 1949 ; New York : Greenwood, 1969) 47 (R).

19) "Bride," Radford, 47 (R).

20) Tuleja, 62.

21) "Bride crosses running water," Opie & Tatem, 39 (R)−40 (L).

22) "Bride ; −bridegroom," *A Concise Etymological Dictionary of Modern English*, ed. Ernest Weekley, rev. ed. (1921 ; London : Secker & Warburg, 1952).

23) "Marriage," 『英米風物資料辞典』井上義昌編，縮刷版第6刷 (1971 ; 東京 : 開拓社, 1989) 849.

Speculation Concerning Superstitions in the Cultural Background of the English & the Americans–(9) Ⅲ LOVE AND MARRIAGE Part 4 : On the Customs and Superstitions of People's Wishing Newlyweds Good Luck Soon after the Wedding Ceremony ; Tossing Confetti, Throwing an Old Shoe, Giving Lots of Kisses to a Bride, etc.

Kunihiro FUJITAKA

Faculty of the College of Liberal Arts and Science for International Studies,
Kurashiki University of Science and the Arts,
2640 Nishinoura, Tsurajima–cho, Kurashiki–shi, Okayama 712–8505, Japan

(Received September 30, 2000)

When newlyweds come out of the chapel after finishing the wedding ceremony, guests and other people wait for them outside, to wish them good luck. The newly–married couple walk slowly arm in arm among the people. And then, colorful confetti is usually tossed over the bride and bridegroom's heads.

The custom of tossing confetti, sometimes shaped like bells or horseshoes as symbols of good luck, is said to have been originally the custom of flinging wheat only over the bride's head. By degrees, rice and corn sometimes came to be flung as well as wheat. We can tell that flinging wheat, rice, corn, etc. means that the people wish the bride to bear robust children in the married life: wheat, rice, corn, etc. are symbolic of fecundity, and the confetti used nowadays seems to be a substitute.

Regarding the newly–married couple's luck, we have to pay attention to another old–fashioned custom: throwing an old shoe (boot) toward the couple's backs. In this custom, an old, left shoe has been favored for its aim. A "shoe" itself is said to symbolize both "good luck" and "new responsibility," but the other items of "old," "left" and "throwing it toward the newlyweds' backs" have been left in the mist. We will make a trial of conjectures as to the very reasons. In addition, the throwing of a shoe often turns into the hanging of shoes from the rear bumper of the car which the couple are riding in for their honeymoon.

In this paper, we will speculate on such a variety of customs and superstitions of people's wishing newlyweds good luck as have been mentioned above, especially those soon after the wedding ceremony. During this speculation, we will also exemplify several practical usages from English literary works.